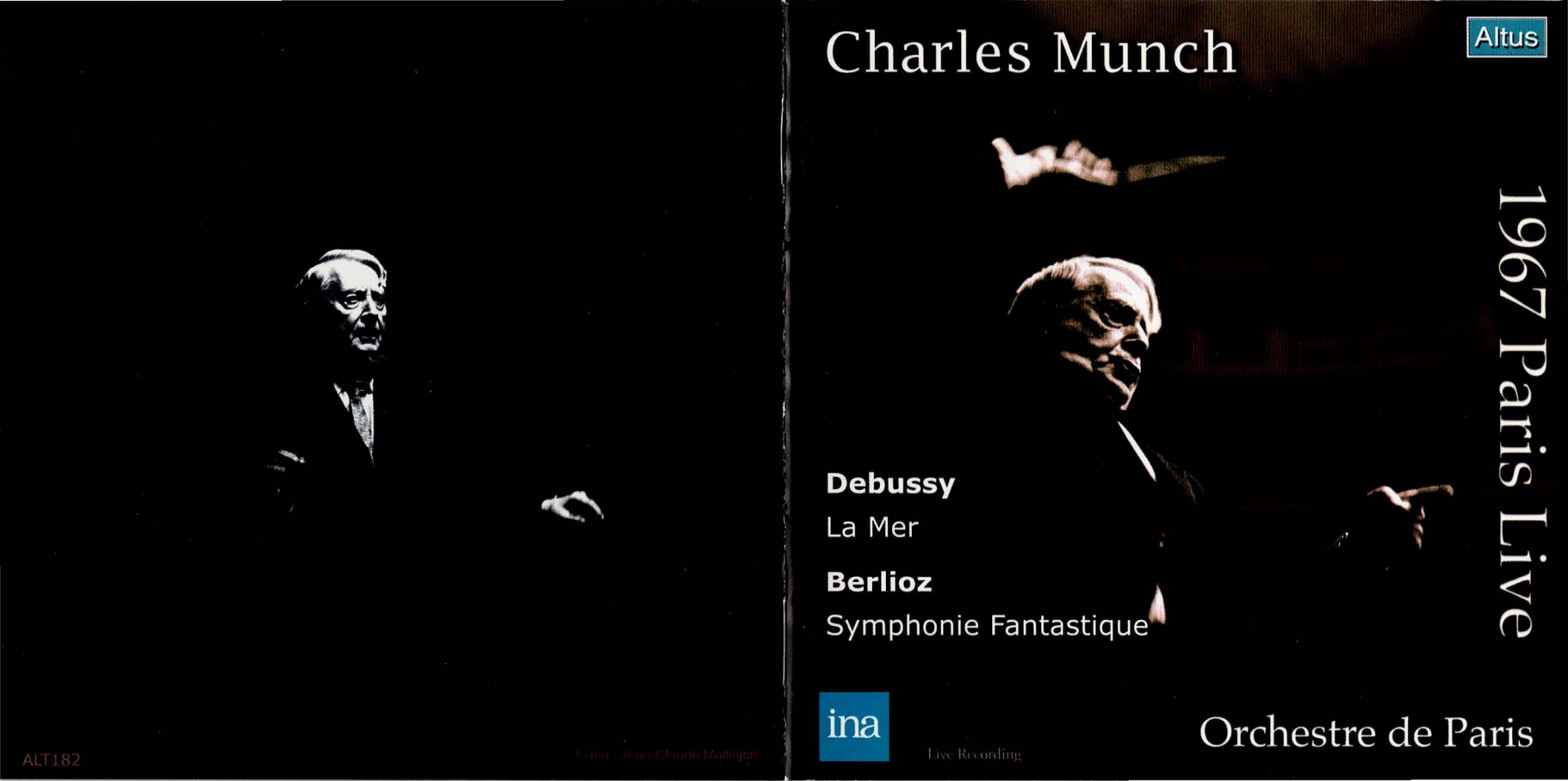




Charles Munch

Altus

1967 Paris Live

Debussy

La Mer

Berlioz

Symphonie Fantastique

ina

Live Recording

Orchestre de Paris

ALT182

© 1994 Jean-Charles Mattheu

ドビュッシー

Claude Debussy 1862 - 1918

管弦楽のための3つの交響的素描『海』

La Mer

『海の夜明けから真昼まで』

- | | | |
|---|----------------------------------|------|
| ① | 1. De l'aube à midi sur la mer | 9:40 |
| | 「波の戯れ」 | |
| ② | 2. Jeux de vagues | 6:37 |
| | 「風と海の対話」 | |
| ③ | 3. Dialogue du vent et de la mer | 8:59 |

ベルリオーズ

Hector Berlioz 1803 - 1869

幻想交響曲 Op.14

Symphonie Fantastique op. 14

「夢—情熱」

- | | | |
|---|-------------------------------|-------|
| ④ | 1. Rêveries, Passions | 13:13 |
| | 「舞踏会」 | |
| ⑤ | 2. Un bal | 6:17 |
| | 「野の風景」 | |
| ⑥ | 3. Scène aux champs | 12:49 |
| | 「断頭台への行進」 | |
| ⑦ | 4. Marche au supplice | 4:10 |
| | 「サバトの夜の夢」 | |
| ⑧ | 5. Songe d'une nuit du Sabbat | 8:51 |

Charles Munch (conductor)

シャルル・ミュンシュ(指揮)

Orchestre de Paris

パリ管弦楽団

1967年11月14日 シャンゼリゼ劇場:ライヴ録音(ステレオ)

Live at: Théâtre des Champs-Élysées 14.11.1967

※一部、音像が不安定になる箇所がございますが、マスターによるものですので予めご了承ください。

シャルル・ミュンシュの経歴と音楽

片倉康行

シャルル・ミュンシュ。この20世紀を代表するフランスの指揮者は、1891年9月26日ストラスブールに生まれました。フランスとドイツの国境沿いにあるアルザス地方の町ストラスブールは、フランス領になったりドイツ領になったりしたところですが、ドレー小説の『最後の授業』はこの町が舞台です。1870年以降ドイツ領で第1次大戦後はフランス領と云った具合です。

ミュンシュ家は、父親のエルネストがサン・ギョーム教会合唱団を設立。バッハのカンタータや受難曲を演奏し、又、アルベルト・シュヴァイツァーがオルガンを担当していました。ミュンシュ家とシュヴァイツァー家は、彼の姉エンマがシュヴァイツァーの弟パウルと結婚し縁続きとなったのです。彼とシュヴァイツァーは幼馴染で大変仲が良かった様です(尤もシュヴァイツァーは16才年上です)。兄フリッツはチェリスト、合唱指揮者と云った具合にミュンシュ家は音楽一家だったのです。当地で彼はダンディ、プフィッツナー、ロバルツ、ヴィドール、ニキッシュ等に接し、

多くの影響を受けたのでした。

フランス、ドイツ両方の影響を受けたこともあって、フランス音楽のみならずブラームス、メンデルスゾーン、シューベルトと云ったドイツ音楽にも大変精通しています。

ストラスブール音楽院でヴァイオリンを学び、その後ベルリンでカール・フレッシュに、1911年パリに出てリュシアン・カペー(カペー弦楽四重奏団の主宰者)に師事、1914年から1918年迄ドイツに徴兵され軍務に就きました。

第1次大戦後は数年間ストラスブールで当地のオーケストラの第2ソロ・ヴァイオリニストとして、更には音楽院の教師として過ごしたのです。その後1926年から1932年迄はライブツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団のコンサート・マスターを務めました。

1932年パリに出て来て、11月オルケstral・ストララムを指揮、指揮者としてのデビューを果たしたのです。41才で指揮者デビューとは今日の感覚から云えばかなり遅い方ではないかと思います。現在で

は20才代の指揮者もあり、その意味からも大器晩成の典型と云えるのではないのでしょうか。その後、コンセル・ラムルー等を客演後、オルケストル・サンフォニック・ド・パリに招かれ、1937年フィリップ・ゴーベルの後任としてパリ音楽院の首席指揮者に選ばれ1945年迄その任に当たりました。その間オネゲル、ルーセル、プーランク等と親しくなり、その他イベール、ミヨー、バロー、マルティノン等多くの同時代の作曲家をとり上げ、1945年にはメシアン《昇天》を初演しています。

第2次大戦後の1946年にはボストン交響楽団及びニューヨーク・フィルハーモニーを振ってアメリカ・デビューを果たし、1948年にはオルケストル・ナショナルとアメリカ演奏旅行。1949年クーセヴィツキーの後任としてボストン交響楽団の音楽監督に任命1962年迄務めました。その間ヨーロッパへの演奏旅行は2回、極東へは1回行っています。我が国には1960年の極東旅行の際来日、聴衆を魅了しました。

ボストン交響楽団より以前に来日したオーケストラは、シンフォニー・オブ・ジ・エアー、及びカラヤンとウィーン・フィルだったと思いますが、ボストンはこの2つのオーケストラと違った印象を与えました。まず音の大きさ、シンフォニー・オブ・ジ・

エアーも大きかったのですが、それを上廻る音量、オーケストラ全員が夢中で弾いている姿、ミュンシュは興に乗ると長い指揮棒を水車の如く振り廻し、要所要所をしめていく、正にオーケストラ演奏会の醍醐味です。しかもミュンシュは下半身をほとんど動かさず上半身のみの動き。今時の指揮者が、かがんだり、のび上ったり全身を使うのとは全く違うのです。これを見ていると、彼の著書『指揮者という仕事』（春秋社刊）の中で、指揮者とは、たくさんの勇氣、情熱、愛情、忍耐、の4つが必要と説いていますが、その中の情熱が最も当たるのではないのでしょうか。更に云えば、彼の演奏は微妙にテンポがゆれるのです。これも昨今の指揮者の多くがわざとらしくテンポを変えますが、彼の場合は知らず知らず変化しそのマジックの虜になってしまうのです。この来日では、十八番の《幻想》を中心にベートーヴェン、ラヴェル、ドビュッシー、バーバー等が演奏されました。

1962年ボストンを退任後、フランスに帰りパリ郊外のルヴシエンヌ（サン・ラザール駅から約40分）に居を構え客演の日々を送っており、1964年12月には再度我が国を訪れています。今回は単身で日本フィルを振ったのです。当時の日本フィルは読売日響が出来たこともあって首席奏者を含

め何名かが引き抜かれ万全でありませんでした。そこにミュンシュ登場となったわけですが案の定、第九演奏会の2日目に第4楽章の入りで、フルートとティンパニー以外全員入れなかったと云う珍事が発生。しかしながらミュンシュは平然と3拍子を振り続け無事音楽は元に戻ったのです。

評論家大木正興氏はミュンシュ/日本フィルの演奏会について「すばらしい、但しこれは頭の中での話で、現実には貧しい音で情けない」と評し、又当時の日本フィル音楽監督渡邊暁雄氏は、世界第一流の指揮者のすごさが分かったと云っておられたのを思い出します。

外来の指揮者が単身日本に来て日本のオーケストラを振る場合、往々にしてそのレベルを日本のオーケストラに合わせてしまうことがあったのです。最近はその様なことはあり得ませんが当時があったのです。しかしミュンシュは全くレベルを落とさず、自分の思う様に振ったため日本フィルはついていけなかったと思われます。ミュンシュの大きな特徴は、その即興性にあります。何しろ演奏する度に違うと云われており、事実第九の演奏会も3日間ありましたが各日微妙に違ったことは事実です。又これはレコードでの話ですが十八番の《幻想》は5回録音していますが全部違

う。最後の録音となったオルケストル・ド・パリとの《幻想》は他と比べるとかなり遅いと云った具合です。楽員も本番と練習が全く違うことが多いため、かなりとまどったのではないのでしょうか。

ミュンシュ最後の来日は1966年10月。今度はフランスのオルケストル・ナショナルとモーリス・ル・ルー、ジョルジュ・セバスティアンの3人と来日、ミュンシュは2回の演奏会を東京で持ちました。曲目は、シューマン、ドビュッシー、フォーレ、ラヴェル、ルーセル等。来日当時75才、相変わらず長い指揮棒、微動だにしない下半身、水車の如く振り廻す指揮棒、ミュンシュ・マジックは健在でした。シューマンについて大木正興氏が「アメリカの高速道路を韋駄天で走っているようなもの」と評されましたが、大変割切った演奏でとにかく明るい、しかしシューマンだからと云ってねちりと暗く演奏する必要はなく、大変ユニークではあるがゆえに感激したものです。

さてその後、1967年オルケストル・ド・パリ（パリ管弦楽団）の初代音楽監督に選ばれたのです。このオーケストラは文化相アンドレ・マルローの構想によるもので、これを機会に各地に国立のオーケストラが誕生しています。オルケストル・ド・パリは、その前身がパリ音楽院でこれを発展

的解消、新に再編成したものです。百余名の団員の中、約3分の1が旧パリ音楽院から、残りの3分の2が外部から、コンサート・マスターはモンテカルロのリューバン・ヨルダーノフでした。音楽監督のミュンシュ以外では常任指揮者にセルジュ・ボード、補助指揮者にジャン・ピエール・ジャッキアと云う布陣です。

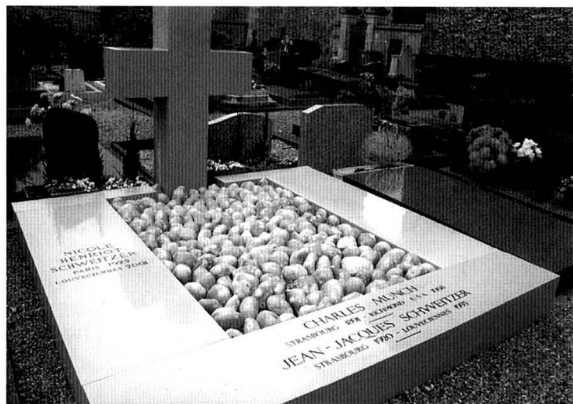
オープニング・コンサートは当CDに収録された1967年11月14日シャンゼリゼ劇場。曲目は《幻想》、《海》ストラヴィンスキーの「レクイエム・カンティクルス」

の3曲でした。

ミュンシュは、1年後の11月6日演奏先のアメリカのリッチモンドで78才の生涯を閉じ、ルヴシェンスの墓地に甥のジャック、姪のニコール・アンリオと眠っています。

オルケストル・ド・パリは、ミュンシュ亡き後、カラヤン、ショルティ、バレンボイム、ピシュコフ、エッシェンバッハそれに2010年よりパーヴォ・ヤルヴィが音楽監督になり更なる発展を期しています。

(片倉興産株式会社 代表取締役社長)



ルヴシェンヌ（仏）のミュンシュの墓

撮影：筆者

パリ管弦楽団の誕生

1967年、ド・ゴール政権、時の文化大臣であったかのアンドレ・マルローは、前年のピエール・ブレーズによる猛烈なフランス楽壇への批判にも促された結果、「ベルリン・フィルに匹敵するオーケストラの創設」を目指し、新たなオーケストラをパリに設立することとなりました。

奇しくも同年6月、パリ音楽院協会副会長であったアンドレ・クリュイタンスが死去すると、マルロー文化相はパリ音楽院管弦楽団の解散を決め、ド・ゴール政権の官僚をかき口説き多額の予算を獲得していたこともあり、11月に新たな国立のオーケストラ、パリ管弦楽団が正式にデビューしました。その新しいオーケストラの使命は「諸外国に、パリおよびフランスの音楽的威信を輝かすこと」。ジョルジュ・テッシェ（パリ管弦楽団代表委員）のこの理念が高らかに掲げられました。初代音楽監督にはフランス系随一の大家指揮者であるシャルル・ミュンシュが迎えられ、まさに適材適所、人を得た門出となりました。

デビュー・コンサートの模様は当時の雑誌などによると「11月14日、パリ、シャンゼリゼ劇場のステージに登場したパリ管弦楽団とシャルル・ミュンシュは、ピ

エール・カルダン氏のデザインした鮮やかなミッドナイト・ブルーの燕尾服、紫色の蝶ネクタイという粋なスタイルで現れ」、当盤で聴くように驚くべき演奏を成し遂げました。当然ながら大変な評判を巻き起こし、フランス演奏史上屈指の名演と讃えられています。

◆パリ管弦楽団発足当時の主力メンバー

ヴァイオリン／コンサート・マスターは、モンテカルロ歌劇場のコンサート・マスターであったリュバン・ヨルダーノフ。ジョルジュ・エネスコの弟子でありパリ音楽院卒の逸材。モナコのレーニエ大公の許しを得ての転出であった。

ヴィオラ／首席にロジェ・ルポー。フランスで大変名の通ったソリスト。

チェロ／首席はアルベール・テタールでパリ音楽院管弦楽団出身。

コントラバス／首席はジャック・カゾラン。室内楽の録音もある名人。

フルート／首席は名人中の名人ミッシェル・デボスト。ジャン＝ピエール・ランパルと並ぶフランスフルート界の代表的存在。パリ音楽院管弦楽団出身。

クラリネット／首席はアンリ・ドゥリユアル。パリ音楽院管弦楽団出身。ギャルド・レピュブリケーヌ五重奏団のメンバー

でもある名人。

トランペット／首席にアントワーン・ラゴ
ルジュ。新たに抜擢された逸材。

トロンボーン／首席にマルセル・ガリー
ク。パリ音楽院管弦楽団以来のベテラン。
オーボエ／パリ音楽院管弦楽団出身の
モーリス・ブルグが首席に就任。

バスーン／首席にアンドレ・セネダ。若手
のホープであった。

ホルン／当時話題の新人ロジェ・アブラ
ムが首席に就任。

チューバ／
フェルナン・ルロンが首席に抜擢。

ティンパニー／
パリ音楽院管弦楽団のベテラン、名人
ジャック・レミ。

上記はか総員 106 名中、パリ音楽院管弦
楽団出身者は 33 名、新人および転出組は
73 名となっていた模様。

(アルトゥス・ミュージック制作部)

■ 曲目解説

●ドビュッシー／交響的素描〈海〉

作曲家にならなかつたら海員になるつ
もりだった、と友人への手紙で語ったド
ビュッシーが、その海への愛情を最高に洗
練された形で表わした作品。彼の作品で最
も交響曲に近接した野心的な作品と言わ
れながら、伝統的な形式では到底分析で
きない自由奔放な構造を持つ。主題は現れる
や、すぐに変化し、増殖を繰り返す。それ
で全体が見事に調和しているという神業。
ドビュッシーの最高傑作との評価も高い。

《海》という標題が付けられているとはい
え、具体的な海の情景を描写している
わけではない。葛飾北斎の浮世絵(「富嶽
三十六景」～神奈川沖)からインスピレ
ーションを受けたものの、もちろんこの絵を
音楽にしようとしたわけでもない。海にま
つわる作曲者のイメージ——それは集積さ
れた記憶と呼び換えてもいいだろう——が
この作品を形作ったのだ。

第1曲「海の夜明けから真昼まで」～
弱奏で開始され、様々な動機が現れては流
れに組み込まれる。次第に音楽は動きを活
発化させ、最後は真昼の太陽を表わす輝か
しいクライマックスを迎えることになる。

第2曲「波の戯れ」～弦楽器のトレモ

ロと木管の和音による弱奏で開始され、三
拍子の舞曲風リズムに乗って、次第に高潮
していく。スケルツィオ楽章風の明暗のコ
ントラストが印象深い。

第3曲「風と海の対話」～打楽器と低弦、
木管との掛け合いの中に、第1曲冒頭で使
われた印象的な主題がトランペットに出現
する。力強い運動性をも備えた楽章で、対
話的に曲は進行する。

●ベルリオーズ／幻想交響曲

病的なまでの感受性と、激しい想像力を
もった芸術家が、恋愛の悩みから絶望に至
り、服毒自殺を図る。しかし服用量が足りず、
死に達することなく、奇怪な夢を見る——。

ベルリオーズの《幻想交響曲》は、つね
にこのような作曲家の言葉と共に語られ
る。麻薬の作用によって生じた幻想を音楽
化したものとして。

奇妙ともいえる題材からなるこの交響曲
は、それぞれの情景に即した巧みかつ大胆
な管弦楽をも実現させる。4人の奏者による
ティンパニ連打、ギロチンを摸したオーケ
ストラの一撃、魔女のざわめきのようなコ
ルレーニョ。この交響曲が初演されたのは、
驚くべきことに、ベートーヴェンが死んで
たった3年しか経っていない1830年なのだ。

先鋭的だったのは、管弦楽法だけではな
い。この《幻想交響曲》では、作曲家が恋

した女性が一つの旋律で表わされ、それが
部分に応じて変化して何度も現れる。フラ
ンクの循環形式やワーグナーのライト・モ
ティーフを先取りした、いわゆるイデー・
フィクス(固定楽想)だ。

ちなみに、イデー・フィクスとして表現
されているのは、ハリエット・スミッソン
という女優だった。ベルリオーズは、当時
人気を集めていたこの女優の舞台を見て恋
心を覚え、熱心にアプローチを試みたが、
相手にしてもらえず、その情熱と鬱積がこ
この交響曲を書く動機となったのだという。

第1楽章「夢-情熱」～ラルゴの序奏を
持つソナタ形式。恋する人が出現し、芸術
家の愛の欲びと苦悩が描かれる。

第2楽章「舞踏会」～ワルツ。芸術家は
恋人を賑やかな舞踏会で見かける。

第3楽章「野の風景」～アダージョ。田
園の風景と、不安と懐疑の高まり。

第4楽章「断頭台への行進」～行進曲。
恋人を殺して死刑を宣告された芸術家が、
断頭台へと引かれていく。

第5楽章「サバトの夜の夢」～死んだ芸
術家が魔女の宴に現れ、そこで娼婦のよう
に落ちぶれた恋人の姿を見る。魔女の踊り
と、グレゴリオ聖歌「怒りの日」の引用と
の聖俗乱れた狂乱の場が展開。

(鈴木淳史)